

子どもは絵本を通して戦争をどう理解するか—戦争文学教材の発掘・読みの実態調査・授業開発—

勝田光（筑波大学 人間系 助教）

1. 問題の所在と研究の目的

小中高等学校の国語教科書には、戦争文学教材が一定数収録されている。国語科における戦争文学教材を読む学習については、これまで多くの国語科教育研究者が問題を指摘してきた。平和という絶対的な価値があるため、児童生徒の読みが似通ったものになる問題である。加えて、近年では、国際的視野から読解力を考える重要性が高まり、外国にルーツを持つなど多様な社会文化背景を持つ児童生徒に対応した国語科の重要性も認識されつつある。戦争文学教材を用いた授業も「太平洋戦争下における日本の子供の受難」を素材にした作品を読み、登場人物の心情を想像することを通して平和の価値を形成する授業を再考する時期にきているだろう。そこで本研究では、教科書収録戦争文学教材と本調査のために選んだ新たな作品（絵本）について、日米の小中大学生の読みを調査する。本研究は、読みの画一化が指摘されていた戦争文学教材について、新たな教材候補になりうる作品と合わせて、日米の児童生徒が示す読者反応の特徴について考察する点に意義がある。

2. 研究方法

戦争について知っていることを書かせた後、2冊の絵本を読み聞かせた。1冊読み終えるごとに「絵本を読んで戦争について考えたことを自由に書いてください」と指示して感想を書かせた。その後、4名の小グループで2冊の絵本について話し合い、最後にクラス全体で共有した。日米共に2種類の絵本を2人に1冊ずつ配布し、感想を書く時、自由に読み返せるようにした。小中大学共通で使用した教材は、小林豊『せかいいちうつくしいぼくの村』（1995年、ポプラ社）である。加えて、小5の調査ではニコラ・デビス『せんそうがやってきた日』（2020年、鈴木出版）、中2の調査ではジョン・マーズデン『ウサギ』（2021年、河出書房新社）、大学の調査ではジョン・タン『アライバル』（2011年、河出書房新社）を用いた。



図1. 日米の小中学校における調査の様子

3. 結果

小中学生が書いた感想文の量的分析の結果を中心に示す。統計分析とテキストマイニングはRで行った。

(1) 日米の戦争に関する既有知識の差異

日米の児童生徒の戦争に関する既有知識はどう異なったのか、戦争について知っていることについて書いた作文について、日小5、日中2、米小5、米中2、以上4群に分けて使用頻度の高い語彙を分析した。その結果、日本の児童生徒の特徴は、「第二次世界大戦」と現在のロシアによるウクライナ侵攻を主に想起し、そのイメージは概してネガティブだったことがわかった。一方、米国の児童生徒は、過去の戦争、とくに第二次世界大戦が想起されやすい点は日本と同じだった。しかし、そのイメージはネガティブなものだけでなく大きく異なった。

(2) 絵本の違いが読みに与える影響

絵本の違いにより日本の児童生徒の読みはどう異なったのか、日本の小中学生が『せかいいちうつくしいぼくの村』『せんそうがやってきた日』『ウサギ』について書いた感想を分析した。その結果、日本の小5は、2冊の絵本いずれも作品の設定や山場となる最後の場面に着目して、主人公と同化し、戦争の悲しさや怖さを体験し、そこから主題や教訓を引き出す読み方をしたことがわかった。日本の中2は、『せかいいちうつくしいぼくの村』では、小5の読みと類似していたものの、『ウサギ』では、自然環境破壊や善悪、人類の歴史など戦争をより広い視野から考える傾向がみられた。

(3) 日米による戦争絵本の読みの差異

日米の違いにより戦争絵本の読みはどう異なったのか、日米の小中学生が書いた感想を分析した。その結果、(1)の分析で明らかにした米国の戦争に対する肯定的イメージが2冊の絵本を読んだ後にも変わらなかった児童生徒がいたことを明らかにした。また、米国の児童生徒は戦争をよく描けているか否か、評価する読みが多いことも明らかにした。

4. 研究の成果

そもそも日米の児童生徒の戦争観が大きく異なること、日米の児童生徒における読み方の特徴的な差異（日本は教訓引き出し型の読み、米国は評価型の読み）を見出したこと、戦争文学教材における読みの画一化という問題について、作品次第では多様な読みが生まれることを明らかにした点が主な研究成果である。